はじまり、おわりに。

小田たつえ

ぐっ。みしっ……。
踏ん張りをきかせる。縛り付けた帯が緊張し、梁を通して建物が揺れる。
姿勢をひとつ戻し、もう一度。
「もう少し腰入れろ」
遠めの声が聞こえる。私に向けてに違いない。そもそも他に向ける相手もいない。
何度も、何度も繰り返す。
「腰は曲げずに膝落とせよ」
「もう少し体が窄まるように上半身も意識するんだぞ」
視点も単調。意識も単調。これで幾度目か。
「次、袖釣込。」
「はい」
姿勢を解き、また次の技をかける。

夕さりつ方。
手招きが目に入る。終わりの合図。
神棚へ向かい、先生と対面する。
「じゃ、明日午前は足技を中心に」
「はい」
正面に対し、礼。
先生に対し、礼。
お互いに、礼。
「お疲れ様でした」

湿り気だけが居座る更衣室。
幾段もある棚の中には、衣でも帯でもなく、埃の積み上がっているのが在るだけ。
黄ばみきった帯が、隅に山を築いて萎びている。
――矢作、伊東、小田、安部、古泉。

白帯の端々、たまに誰のか分からなくなることがあって、名前を書いて保管していた。
「もう必要ないよね」
上辺りを鷲掴みにし、入口の袋に詰め込む。衣が底に沈んでいて、上で帯がとぐろを巻いている。
そうして、自分の衣を脱ぐ。下に着たウェアも着替える。脱いだのを鞄に詰め込んで、武道場を後にする。ひとり。
ここ一か月、これを繰返している。昔は、もっといたのにな。
この半年のことは、多分最後には私の頭の中にしか残らない。
今時、こんなのが流行らないことはわかっている。私自身、少し身綺麗になりたいと思っていて、このままだとなんの衒いも無い傷だらけの姿になってしまう。正直、嫌だった。
「美月、怪我大丈夫？」
「あんまり無理せんでね」
昔からかけられてきた声。外面の時点でもう痛々しいから、その声には心底からの不安が宿っていた。痛いものは痛いが、幾度もやれば、私にとってはまたやったの一言で済む。
あと2か月ちょっと。あっという間だろうな。
表扉から、職員室へ向かう。淡青が橙を侵していく空に、辛うじて見える星が一つだけ。

……職員室へと鍵を届けた。あとは家に戻るだけ。勉強は家ではしたくない。代わりに、学校の間は休み時間も勉強しておく。いよいよ橙が消えかかる。通りは、帰宅ラッシュで相変わらず渋滞していた。
そして、右手に見える更地。ここに少し前まで通ってい

たのが、やっぱり奇妙に思える。
「先生、元気かな」
半年前まで、この空間に私の時間の大半があったって考えると、えも言われない。入った時から、なくなく辞めた日まで。すっと心の中で画が浮かんで、流れ行く。最初の方は、やっぱり時間があまりに経過したせいで銀塩写真になっている。
ふと、その一枚に気が掛かる。私と組んだ男の子。子供の頃、男女関係なく混ざってやっていた頃。何枚か、同じ子と組んでいた。休み時間の時も、一緒だった。でも、そのこと以外、何も思い出せない。……あんまり前だから、仕方ないか。
一週間の終わった感覚と、もう少し新しい写真たちに、あの写真たちは流されていった。

黴臭さの漂う、武道場。擦り切れの、樹脂皮の畳。赤緑。タイマー。先生は用事で結構遅れてくるらしい。うん、中は昨日と同じ。
……じゃない。
柔道場の隅にひとりの、男の子。青地に名前が銀色の糸で縫い付けられているのは、同じ学年だ。そういえば、鍵も開いてたっけ。もしかして。
「あ、あの……」
彼がこっちに気づいた。
「あ、蜂須さん」
え。
「蜂須美月さん、ですよね？」
「え、あ、そうですけど……」
「田口勝です。すっごく久しぶりだけど、覚えてます？」
「あ、えっと、どこかで会いましたか」
「道場」
「……あ！」
カッちゃん。子供の時、いつも相手になってくれていた、あの銀塩写真の子。
「思い出した？」
こくこくと頷く。
「よかったよかった」
「あれ、ここの中学校だったの？」
「そうだよ」
「え、なんで今まで気づかなかったんだろ」
「母親が結婚して苗字が変わったんだよ。だから今は」
体操服の苗字は、石田だった。
「あ、そうだったんだ。でも数年同じ学年だったのに、全然気づかなかった」
「だいぶ昔のことだしね、一緒にやってたの。印象も変わっちゃうしさ、しかたないよ」
「声かけてくれればよかったのに」
「いいや、あんまりそういうことで声かけるのは好きじゃないから」
「そっかそっか」
銀塩写真は、白黒を通り越して高精細のカラー写真になった。
「あ、そうそう」
カッちゃんが、鞄から白いものを取り出した。衣だった。しかも、結構使いこんである。
「実は、まだ続けてたんだ」
「え。大会とかは？」
「出たよ何回か。トーナメントは早めにおいとしましたけど」
「ええでも出ること自体が大事なんだから、いいじゃんいいじゃん」
「優しいかよ」
懐かしい。画像が今度は、映像になって甦る。
「ねえ」
「なに？」
「蜂須さんってさ」
「美月でも良いよ、昔みたくみっちゃんでもええよ」
「あ、じゃあ、みっちゃん」
「ん？」
「練習、相手いないんだろ」
「……うん」
「休部、なんだってね」
「うん」
「練習付き合うよ」
「え、いいの？」
「いいよ。俺今日何も予定ないし、美月もたまには相手ほしいだろ」
「体格、大丈夫なの」
「みっちゃん、何キロ級？」
「ゴーナナ」（注一）
「俺ゴーゴだから、大して変わらないよ」（注二）
「身長は……。あんま変わらない？　わたし１７５センチだけど」
「同じだわ」
「まじか。相手として完ぺき」
「じゃあ決まりだな。着替えるわ」
「わかった、ありがと」

少し、前みたいな気持ちが湧いた。楽しみみたいな、そんな気持ちが。

武道場には、きりっとした彼が待っていた。準備運動と回転運動をして、まずは技の打ち込み(注三)から。

「技は？」

「じゃあ、大外から」

ぐっと力をこめて、技の入りを確かめる。男子にやるとなると、なおさら力いっぱいにしても問題ない。

「カッちゃんもやる？」

「ああ。じゃ、背負い投げ、いい？」

「うん」

目前で回る躰。偶に浮き上がりそうになるのを踏ん張る。

「入り方早いね。でも綺麗に決まってる」

「昔から使ってるし、これが一番使う技なんだよね」

「いいと思う。でも足がブレることあるから気を付けて」

「おう。ありがと」

しばらく、技を変えながら続けた。汗が出る。久しぶりの感覚。

「休憩すっか」

「うん」

部屋にタオルと飲み物を取ってきた。窓を開け、風通しの利いた柔道場。

「いやあ、足技一つとっても敵わないや」

「そう？」

「いざ実戦、ってなるとぐだついちゃうんだよな」

「そりゃうちもだよ」

「いいや、打ち込みで綺麗だと思えるやつは実戦でも華麗に決められる」

「お誉めの言葉って受け取っていいの？」

「まあそんなとこ」

けらけら笑う彼に、自分も引き寄せられる。

「……じゃ、乱取りもやろか？」(注四)

「いいの？」

「問題ないよ」

「ふふ。じゃあ、お言葉に甘えて。時間は？」

「3分。試合形式の、一本勝負で行こう」

「一本勝負？」

「せっかくだったら、一本に全部出したいなって」

「おっけ。じゃあ」

タイマーの準備をして、場の中央に対面する。試合と同じように、礼をする。

3分が始まる。一気に襟元にとびかかる。しっかりと組み合う。少しの、硬直。すこしして、互いのあいだに隙間が空きはじめる。ぐっと、カッちゃんが隙間に身を落とし、一瞬で躰を回す。背負い投げ。咄嗟に、重心を後ろにずらす。何とか踏ん張る。体勢が崩れる。寝技だ。怯んだところに、袈裟固め。回して、体勢を固くする。口でカウントする。まず10秒以上を(注五)。カッちゃんはブリッジで逃れようとしている。させない。20までカウントした。私の一本勝ち。

「はあ。いや、絞められたわ。逃げられない」

「こっちも少し危なかった、背負い投げでもってかれそうになって」

また、笑った。お互い、体が熱くて、楽しくてしょうがない。二人で、中央に寝そべる。

「あっという間だったわ。強いな、みっちゃん」

「カッちゃんこそ」

「……ありがとな」

「こちらこそ。久しぶりの実戦で、短かったけど、いい試合だった」

少しだけ間があく。お互い、まだ息が荒い。

「あのさ」

「うん？」

「中学卒業したら」

「柔道どうするのって？」

二人で目が合う。少し、彼が頷いた。

「それなら、カッちゃんにも聞きたい」

「俺は続けるよ。運動不足はごめんだし」

「目的そこなの？」

「実戦とかじゃ勝てる技量ないし」

「でもさっきの背負い投げを見るに、十分行けると思うよ」

「……」

「なによ、しんみりしちゃって」

「いや、みっちゃんに言われちゃ頑張らなきゃなって」

「おうおう、せいぜい頑張りたまえ～」

「みっちゃんの方は？」

「……私、ね。道場もなくなったし、この柔道部もなくなっちゃうし。ここで終わりかなって」

「まじ？ 俺は、続けた方が良いと思うよ」

「でも、高校ではもう少し勉強したいな、って。運動も好きだけど、いろんなこと知りたい、ってのが今思うとこなんだよね」

「ふーん。そっか。ま、みっちゃんの思うところがあるんだったら、それでいいと思うよ」

「ご、ごめんね」

「なんで」

「いや、続けてほしいって言ってんのに、わがままで」
「みっちゃん、そりゃわがままじゃなくて、自分で決めた事だよ。だから別に問題ない。それに」
「え？」
「決めたら曲げないのは、みっちゃんらしいしさ。昔から変わんないな」
「ありがと」
携帯の音が鳴った。
「あ、やっべ、俺だわ」
すっと立ち上がって、鞄に駆け寄る。スマホを取り出して、ささっと出入り口の方に向かう。
ふと、眠気がよぎった。久しぶりの実戦で、体力をひどく使ってしまったらしい。眠い。

「……。……す。蜂須……。」
目が覚める。視界を、先生の顔が独占していた。
「あ、す、すいません！」
「気にすんな。打ち込みも、続けてじゃあ疲れるしな」
「ほんとすいません……」
あ、さっきのこと。
「あ、そういえば先生」
「どうした」
「さっき、同級生が来てくれて」
「え？」
「柔道経験者で、練習に付き合ってくれたんです」
「は？」
「たぶん、電話行ってるだけなん、で……」
周りを見渡せど、彼の荷物は見当たらなかった。
「え、そいつ同級生って言ってたけど、名前は？」
「田口勝です。知ってますか？」
「え？」
「どうしたんですか？」
「いや、田口って」

夕さりつ方。
手招きが目に入る。終わりの合図。
神棚へ向かい、先生と対面する。
「じゃ、明後日は投技を中心に」
「はい」
正面に対し、礼。
先生に対し、礼。
お互いに、礼。
「お疲れ様でした」

湿り気だけが居座る更衣室。
幾段もある棚の中には、衣でも帯でもなく、埃の積み上がっているのが在るだけ。
入口の袋には、衣が底に沈んでいて、上で帯がとぐろを巻いている。
――矢作、伊東、小田、安部、古泉。
白帯の端々、たまに誰のか分からなくなることがあって、名前を書いて保管していた。
「もう必要ないんだね」
自分の衣を脱ぐ。下に着たウェアも着替える。脱いだのを鞄に詰め込んで、武道場を後にする。扉に錠をかける。職員室に届ける。ひとり。ここ一か月、これを繰返している。昔は、もっといたのにな。
君も、確かにいたのにな、あの日には。

※
注一・注二
現在、中学校における柔道競技の体重別の組み分けは以下の様になっている。
・男子：５５kg級、６０kg級、６６kg級、７３kg級、８１kg級、９０kg級、９０kg超級
・女子：４４kg級、４８kg級、５２kg級、５７kg級、６３kg級、７０kg級、７０kg超級
参考までに、筆者が中学校時代に柔道部に所属していた際、筆者は男子５５kg級→６０kg級または６６kg級で出場した。

注三
技を投げ飛ばす直前の動作まで行い、主に技の入り方を確認する練習のこと。

注四
柔道での乱取りは、ほぼ実戦練習のことを示す。ただし、技への判定は行わず、一定時間単位で行うこともある。

注五
柔道の寝技において、１０秒から２０秒未満まで抑え込んだ場合は「技あり」、２０秒以上で「一本」。なお、「技あり」２つで「合わせて一本」となる。一本を取った場合、その場で試合終了となる。